

第2章 江戸川らしさの発見

第1節 江戸川区の現況

1. 本区の概要

(1) 本区の位置

本区は東京都の最東端に位置しており、江戸川と荒川の二大河川が東西を流れ南には東京湾を望み、面積が 49.09km² で東西約 8km、南北約 13km の広がりがあります。

東京 23 区図



(2) 人口・世帯数

平成 22 年 1 月の住民基本台帳によると、本区の人口は約 67 万人、世帯数は約 30 万世帯で、今なお人口は増加傾向にあります。

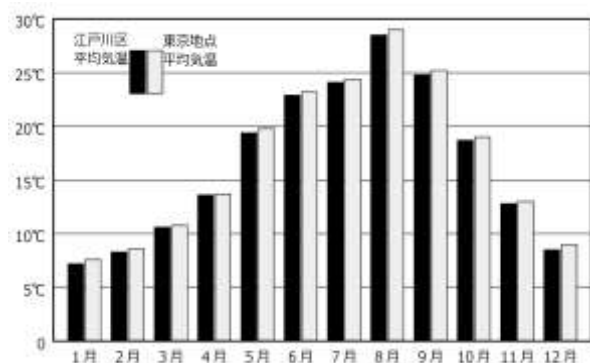
平均年齢が 41.1 歳と、東京都 23 区の平均の 43.4 歳に比べて 2 歳以上若く、年齢別人口構成比では幼少人口が 14.8%と、東京都 23 区の平均の 11.2%に比べて子どもの割合が多いのが特徴です。

(3) 気候

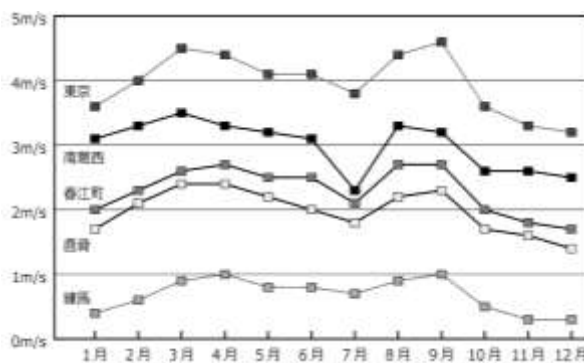
本区の大気観測データを測定している、南葛西、鹿骨、春江町の 3 局の気温を平均すると、年間平均気温は 16.6 度(平成 19 年)となっています。東京地点(中央区)との各月の気温差は平均 0.3℃低く、特に 8 月は 0.5℃以上の差があります。

また、3 局の風速を平均すると、年間平均 2.4m/s で、年間を通じて東京地点(中央区)に比べて月別平均風速が低く、本区より内陸部に位置する練馬地点(練馬区)より高い傾向にあります。

月別平均気温 (平成 19 年)



月別平均風速 (平成 19 年)



出典：気象庁気象統計情報・江戸川区大気観測データ

(4) 主な歴史

本区に人が住み始めた弥生時代後期から現在までの主な歴史を以下にまとめます。

●本区の歴史は約 1800 年前から

古代、海の底にあった本区は、約 3000 年前から次第に陸地ができてはじめました。そして、約 1800 年前の弥生時代後期に、小岩に人が住み始め、約 1600 年前の古墳時代には、半農半漁の生活を営む人々が住んでいたと言われていました。これは、上小岩遺跡の稲の籾のあとをついた土器や土錘(魚を捕る網に使った土のおもり)など、様々な出土品が多くを物語っています。

●鎌倉時代には付けられていた地名

平安時代の末頃から鎌倉時代にかけて、葛西氏が現在の江戸川区、葛飾区などを治めていました。この頃には、上小岩・下小岩・松本・鹿骨・上篠崎・下篠崎・鎌田・今井・西一之江・東一之江・二之江・一色・下平井・西小松川・東小松川・長島といった、現在も使われている地名がありました。

●農村風景の中に、旅人と舟が行き交うにぎわい

16 世紀になると北条氏がこの地を治め、次第に人口が増えて耕地も広がっていきました。さらに、家康が関東へ来て江戸の城下町づくりが始まると、本区のほとんどが幕府領となり、宇喜新田、伊豫(いよ)新田、一之江新田など、新田開発が盛んになりました。また、元佐倉道、岩槻道、行徳道などは旅する人々でにぎわい、江戸川や新川は荷物や旅客を乗せて往来する舟でにぎわっていました。一之江名主屋敷は、このような農村の風景を今に残す、貴重な財産となっています。

●蓮根・野菜・花卉・海苔・貝、和傘などの産業の多様化

明治時代になると、総武線の開通とともに人口が増え始め、昭和 7 年の江戸川区が誕生した頃には、人口が 10 万人になっていました。

江戸時代には米づくりが盛んでしたが、明治時代にはいると蓮根や、畑では野菜や花卉、葛西浦では海苔や貝の養殖が行われるようになりました。また、小岩では「小岩は傘でたつ。」とまで言われるほど、和傘の特産地として知られていました。

●太平洋戦争による大きな被害

昭和 16 年に日本が太平洋戦争に突入し、戦争が激しくなるにつれ、東京も空襲されるようになりました。子どもたちは空襲にそなえて、主に山形県に集団疎開しました。昭和 20 年の東京大空襲では、平井・小松川地区一帯が消失するなど大きな被害を受けました。

●高度経済成長とともに進む都市開発

昭和 30 年代からの日本経済の高度成長に伴い、地下鉄東西線の開通などで区の人口も急増しました。急速な都市化の進展により、昭和 40 年頃には、生活排水による河川の水質汚濁、自動車の排気ガスによる大気汚染など、都市環境の悪化が深刻な問題となりました。

このような問題を解決するため、全国で初めての親水公園を整備するほか、土地区画整理事業、海面埋立事業等による道路の整備、公園や街路樹などの緑の充実を行い、安心して安全なまちづくりを進めてきました。その結果、都心へのアクセスしやすい立地に加え水と緑豊かな環境などにより、住みやすい、子育てしやすいまちとして、発展してきました。

2. 自然的条件の整理

(1) 地形・河川

本区は江戸川の河口に広がる三角州の上であり、東に江戸川、旧江戸川、西は旧中川及び荒川、中川、南は東京湾と、三方を河川と海に囲まれ、区面積の約7割がゼロメートル地帯と呼ばれる低地となっています。

区内には7つの河川が流れ、東京湾からの海風を陸地に運ぶ動脈として、風の道の機能を担っています。この豊かな水辺の環境により、他区に比べてヒートアイランド現象が緩和されています。

(2) 緑地・樹木

緑被率(区全体面積に対する緑の総量)は、16.4%(平成18年度)であり、内訳では、公園内の緑(樹木・草地)や、宅地内の樹木が占める割合が高くなっています。増加率では道路の緑は増加していますが、農地や草地の面積は減少傾向にあります。

樹木本数は、約577万本(平成21年4月)であり、約30年前の約120万本(昭和47年)に比べて4倍以上に増えています。

大木も多く分布し、保護樹として登録されている樹木が397本(平成21年4月)あります。

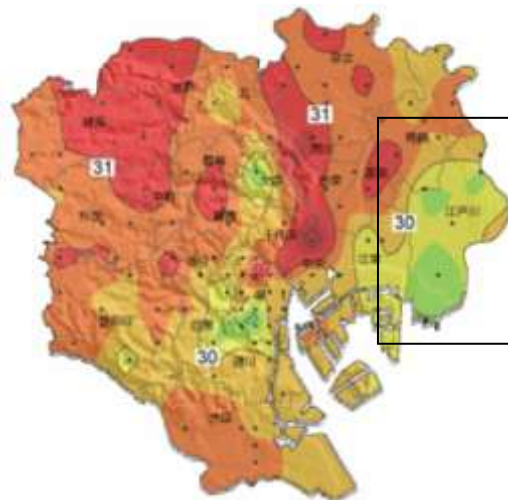
(3) 動植物

本区は海水(塩分が多く含まれた水)、汽水(淡水と海水が混じり合った水)、淡水(塩分を含まない水)の3つの異なる水域があります。

この多様な水域と、葛西臨海公園の鳥類園や河川敷の芦原、河川の水を活かした親水公園や親水緑道、区民の手により創出されたビオトープなどの生き物に配慮した公園・緑地等の保全・整備により、多様な種類の生き物が見られます。

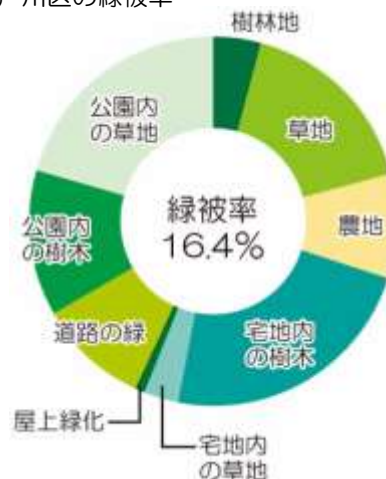
河川敷にはミゾコウジュやウラギク、タコノアシなどの希少な在来植物、まちなかで身近にみられるスズメやシジュウカラをはじめ、チョウゲンボウやホオジロ、セイタカシギなど、年間を通じて50種以上の野鳥や、トビハゼやテナガエビ、ウナギなどの生物もみられます。

23区の日最高気温平均値の比較(2005年)

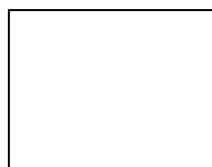


出典：エコタウンエドがわ推進計画
(平成20年2月)より

江戸川区の緑被率



出典：「江戸川区の土地利用」江戸川区
(平成19年3月)



タコノアシ



シジュウカラ



セイタカシギ



トビハゼ

水と緑の現況図



3. 社会的条件の整理

(1) 歴史・文化

1) 寺社・寺社集積地

善養寺や浅間神社、平井聖天など、寺社が区内各地に分布しています。特に、小岩市川の渡しのある北小岩三丁目付近や、東葛西二丁目付近、東小松川付近など、かつての集落のあった地域では、寺社が集積する趣ある景観が形成されています。



北野神社（小岩）

2) 有形文化財・天然記念物等

かつて小岩市川の渡し場にあった常燈明などの有形文化財が計 124 件、区内各所に多く見られる富士塚などの有形民俗文化財が計 35 件あります。史跡は、一之江名主屋敷など計 20 件、東京都指定文化財でもある善養寺影向の松をはじめとする天然記念物が計 7 件あります。



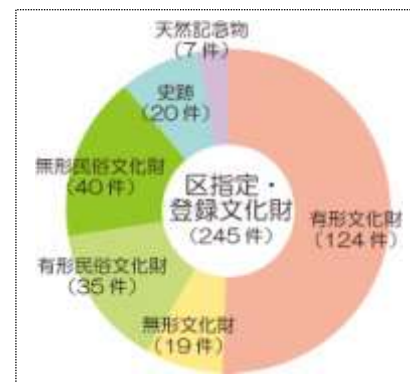
のぼり祭り（浅間神社）

このほかにも、旧小松川閘門や将監の鼻など、歴史を感じる資源が多く残っています。

文化財数（平成 20 年 4 月）

3) 伝統行事

浅間神社ののぼり祭や雷の大般若、葛西大師まいりなど、40 件が江戸川区無形文化財となっています。



4) 遺跡

区内最大の上小岩遺跡をはじめ、大和時代から鎌倉時代にかけての数多くの遺跡が発見されています。貝塚も発見されており、貝をとって生活をしていたことがうかがわれます。

明治期の主な水路位置図

5) 歴史的な道

江戸時代における主要道路として、逆井の渡から小岩に通ずる元佐倉道及び新宿から小岩を経て市川に向かう佐倉街道、行徳道、岩槻道などがありました。現在も佐倉街道は千葉街道として、行徳道は今井街道として、本区を支える重要な幹線道路となっています。



「まちの変遷とまちづくりの実績」江戸川区（平成 9 年 7 月）より加工

6) 水路跡

かつて区内には 420km にも及ぶ水路や中小河川がありました。しかし、都市化の発展とともに環境悪化が進み、埋立や暗渠化されてしまいましたが、現在は親水公園や親水緑道、緑道などに整備され、土地の歴史を残す貴重な資源となっています。

歴史・文化資源現況図



(2) 都市施設・土地利用等

1) 都市施設

土地区画整理事業や再開発事業等により、公園や道路、公共建物など、都市施設の整備が充実しています。

- ・ 本区を東西南北に結ぶ多くの幹線道路、戦前より開通していたJR 総武線から近年開通した都営新宿線など、東京都心と千葉県を結ぶ5つの鉄道路線など、充実した交通網が形成されています。
- ・ 区役所やタワーホール船堀、総合文化センター、各地域の事務所やコミュニティ会館などの公共建物も充実しています。
- ・ 公園・児童遊園等は、昭和45年には、98園、総面積約38haでしたが、平成21年には、439園、総面積758haとなり、23区内一の面積を誇っています。これらのオープンスペースを活かし、健康の道や花の名所など、多様なレクリエーション施設が整備されています。
- ・ 荒川ロックゲート、江戸川水門(篠崎水門)、今井水門などの水閘門や、区内110橋にも及ぶ橋梁など、水辺に関する施設が多く点在しています。

2) 土地・建物

宅地の約6割が住宅用地となっている、住宅地が主体のまちなみが形成されています。

本区の建物の9割以上が3階建て以下の低層建物となっています。

3階建ての建物や利用建ぺい率の増加、専用独立住宅の平均敷地面積の減少などにより、ゆとりある空間が減少傾向にあります。

道路・鉄道交通量

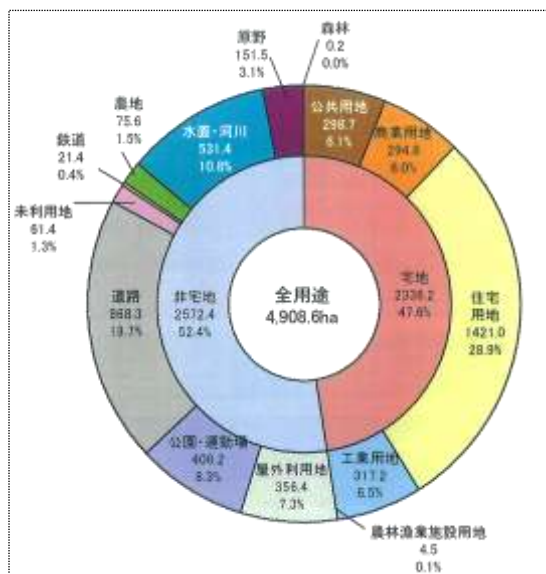


出典：平成20年版統計江戸川

公園・児童遊園面積の推移



土地利用の現況



出典：「江戸川区の土地利用」江戸川区(平成19年3月)

都市施設現況図



(4) 産業・イベント等

1) 商業

駅前を中心に、幹線道路沿道や団地内など、多くの商店街が形成されています。最も大きい商店街は小岩駅前で四季を通じて様々なイベントなどが開催されています。



2) 工業

かつて江東工業地帯の外縁として工場が多く分布していましたが、現在は減少傾向にあります。町工場が集積する松江地域や小松川テクノタウンなどでは、今なお「ものづくり」の場が残っています。



3) 農業（小松菜・花卉）

鹿骨地域を中心に、主に小松菜と花卉が生産されています。小松菜の収穫量は、日本一、二を競い、花卉は夏の風物詩として有名な入谷の朝顔市の約7割を生産しています。区内で唯一残っている水田では、しめ縄がつくられています。



4) 金魚養殖

戦前の最盛期に23軒あった養殖業者も、現在は2軒になりましたが、今なお東京都淡水魚養殖漁業協同組合の生産量・販売量ともその3割近くを占めています。



5) 屋形船

江戸屋形船事業組合に17件が登録しており、江戸川、旧江戸川沿いに分布しています。江戸川に伝わる伝統漁法「投網」を残すため船宿の有志による江戸投網保存会が発足し、5月に江戸川今井橋前にて「お江戸投網まつり」を実施しています。



6) 伝統的な地域産業

江戸川区無形文化財・伝統技術に指定・登録されているものは、江戸被切子やつりしのぶなど、19件あり、このほかにも多くの伝統的な地域産業が残っています。現在、えどがわ伝統工芸産学公プロジェクトなど新たなブランド化の取り組みが始まっています。



7) 催し・イベント

区民祭り、緑のフェスティバルや小岩菖蒲園まつり、花火大会など年間を通じて様々なイベント・催し物があります。特に桜やバラ、菖蒲など、区内には花の名所が多く、花に関するイベントが多く開催されています。

産業・イベント等現況図



(4) 区民活動

1) 町会・自治会活動

昭和30年代からの高度成長期に起きた様々な環境問題を区と区民が一丸となってまちの美化活動、緑化運動を進めながらこれを克服し、現在の良好な環境を作り上げてきました。現在でも当時の運動の中心だった町会、自治会などから組織される、環境をよくする地区協議会、親水公園を愛する会などの活動が行われています。

町会・自治会数
(平成21年12月)



2) アダプト活動

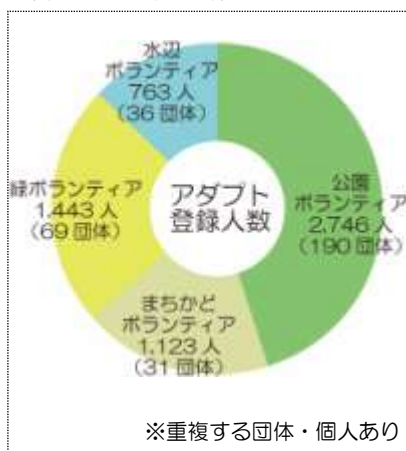
自治会などの組織とは別に、気の合った仲間同士や個人単位で区内のいたるところでボランティア活動が展開され、区内の公園、河川敷、歩道植栽帯などの公共空間で清掃活動、樹木や草花の手入れ、プレーパークの運営、ビオトープ・花壇づくりなどを行なっています。

区は、こうした活動を支援する名目で、アダプト登録制度を作り、活動相談をはじめ清掃器具の支給やごみ処理の支援などを行っています。

また、アダプト活動交流会が年に1回開催され、それぞれのボランティア活動の報告や交流が行われています。

現在、アダプト制度登録者は合計約6,000人で今も増え続けています。

アダプト制度登録人数
(平成22月1月)



区民活動現況図



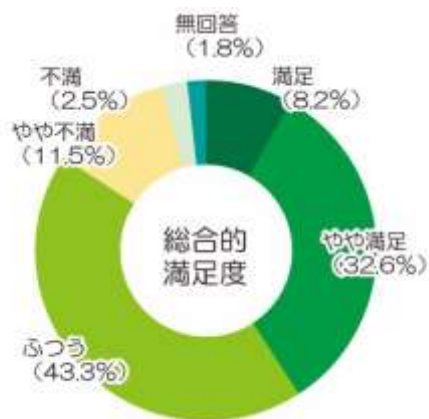
4. 区民意識

平成20年5～6月に実施した、第28回江戸川区民世論調査をもとに、景観に関する区民意識を以下にまとめます。

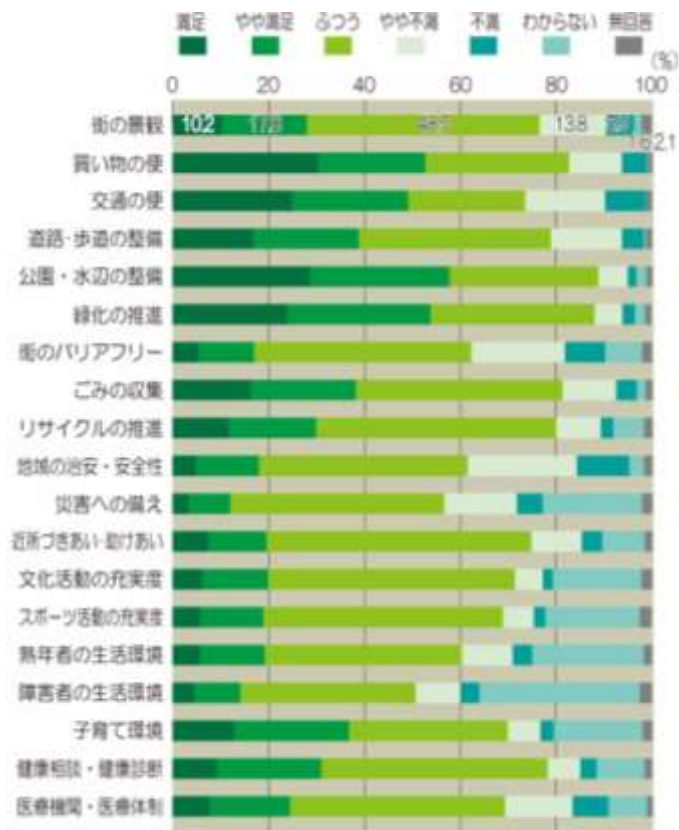
(1) 本区の現状について

本区の現況を総合的に見た場合、「満足」と「やや満足」が約4割で、「ふつう」も約4割となっています。

項目別に見た場合、「公園・水辺の整備」や「緑化の推進」の満足度が高い傾向にあり、「街の景観」については、「ふつう」が約5割を占めています。

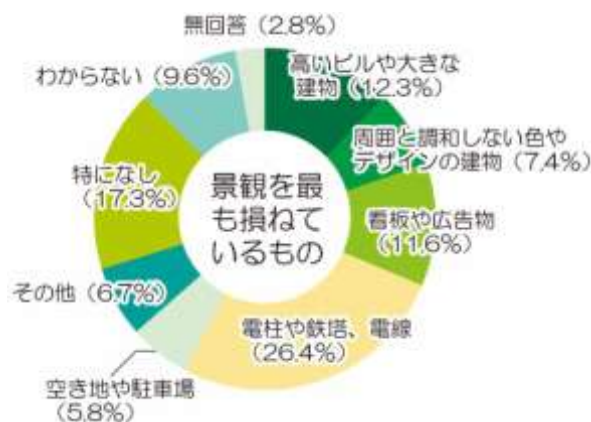
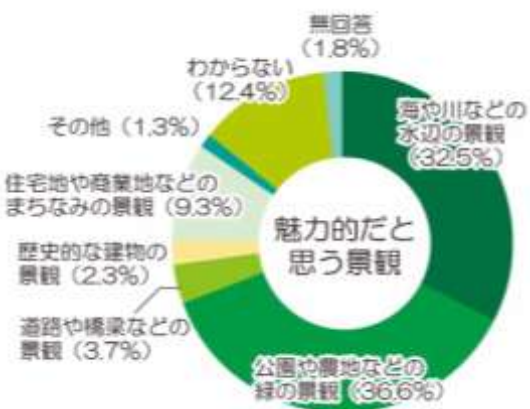


区の現状に対する項目別満足度



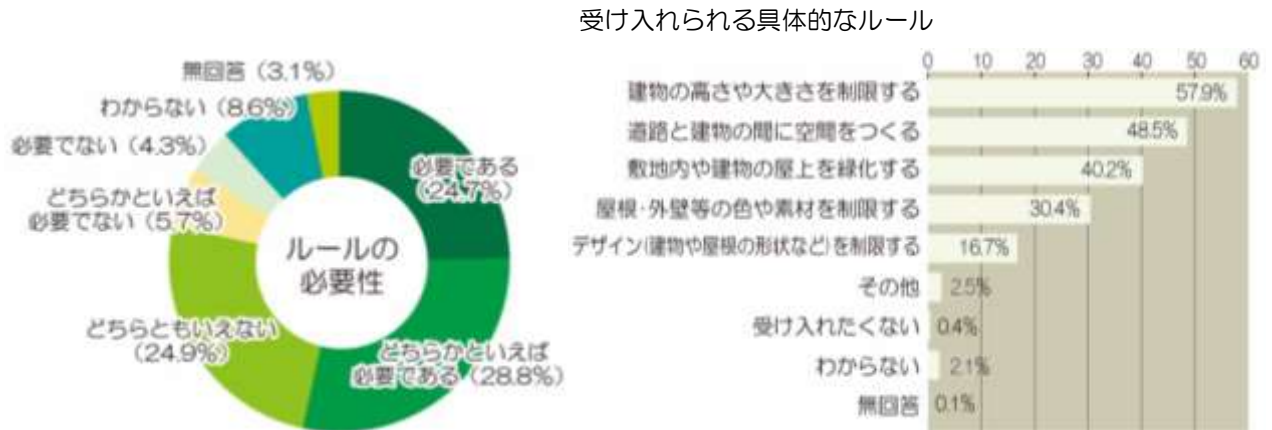
(2) 本区の景観について

日常生活の中で区内の魅力的な景観として、「公園や農地などの緑の景観」や、「海や川などの水辺の景観」が多くあげられました。一方で、景観を最も阻害している要因として、「電柱や鉄塔、電線」が多くあげられました。



(3) 景観づくりにおけるルールの必要性

良好な景観づくりのために、建物の高さや色などについて具体的なルールをつくり、誘導していくことが「必要である」、「どちらかといえば必要である」と回答した人が半数以上ありました。また、家やビルを建てる時の具体的なルールとして、「建物の高さや大きさを制限する」、「道路と建物の間に空間をつくる」及び「敷地内や建物の屋上を緑化する」については、それぞれ全回答者の2割以上が受け入れられると答えています。



(4) 地域活動への参加について

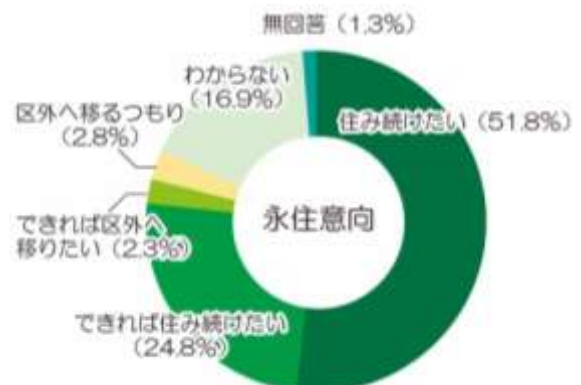
区では、「保育ママ」、「すくすくスクール」、「安全・安心パトロール」など様々な事業や取り組みが町会・自治会やボランティアなどにより展開されています。これらの地域活動に「現在参加している」及び「過去に参加したことがある」との回答は、全体の約2割程度でした。

地域活動への参加意向は、「ぜひ参加したい」、「きっかけや条件が整えば参加したい」及び「(仕事や健康上の理由などにより)参加したいが、できない」との回答は、全体の約6割以上でした。



(5) 永住意向について

「今後も江戸川区に住み続けたいか」との問いに、「住み続けたい」「できれば住み続けたい」と永住意向を示した人が、全体の7割以上を占めています。



第2節 江戸川らしさのある景観

1. 区民が発見した「江戸川らしさ」

本区には、地域ごとに様々な景観要素が重なり合って形成される、多様な地域の特性「江戸川らしさ」があります。

本区で暮らす人々が日頃感じる「江戸川らしさ」から、本区の景観について考えていくため、本計画を策定するにあたり景観まちづくりワークショップを開催し、多様な「江戸川らしさ」を発見しました。

これらの「江戸川らしさ」には、目に見えるものばかりではなく、音や匂い、雰囲気などの五感を使って感じるものもあります。

●景観まちづくりワークショップ

区民と区職員がともに本区の景観を考える場として、平成20年度より開催し、まちあるき等を通じて、江戸川らしさを見つけたり、今後の景観のあり方について、話し合いました。



2. 本区の景観を構成する要素

「江戸川区の現況」と、「区民が発見した江戸川らしさ」から、本区の景観を構成する主要な要素を5つにまとめました。本区の景観は、これらの要素が重なり合って形成されています。



3. 江戸川らしさのある景観

本区の景観を構成する要素ごとに、景観特性と今後の課題、区民が発見した江戸川らしさをまとめます。

(1) 水と緑



三方が河川、海の水域に囲まれ、高低差のほとんどない地形的特性となっています。公園や河川敷などの広大なオープンスペース、全域に整備されている親水公園や親水緑道など、水と緑を基盤とした豊かでのびやかな景観を形成しています。また、水と緑は風の道をつくり、ヒートアイランド現象が緩和されるなど、住みよい環境をつくりだしています。公園面積や街路樹本数は23区第一位を誇り、サクラやシヨウブ、バラなどの数多く分布する花の名所や、多様な生き物など、区民が身近に緑や自然とふれあう機会が数多くあるのが特徴です。

景観形成における課題

- ・減少しつつある大木や農地等の保全
- ・風の道を形成する水と緑豊かなまちの保全、創出
- ・より区民が水と緑と親しめる環境、機会づくり
- ・既存の水と緑を活かしたネットワークの形成

区民が発見した江戸川らしさ



(2) 歴史・文化



区内各所に遺跡や寺社、伝統行事、大木などの歴史的・文化的資源が点在しており、その多くが都や区の文化財として保全されています。

また、江戸と房総を結んでいたかつての旧道や、区内 420km にもおよんだ用水路跡、地名、地域の人々によって支えられている伝統行事なども歴史を今に伝える資源となっています。かつて使われていた水閘門の遺跡など、水辺の都市ならではの歴史的・文化的資源が多いのも特徴です。

景観形成における課題

- ・まちの歴史を知る機会の拡充
- ・歴史的・文化的資源とその周辺が一体となった景観の保全・創出
- ・すでに失われてしまった歴史的・文化的資源の再生

区民が発見した江戸川らしさ



(3) まちなみ



土地区画整理事業や再開発事業などにより、道路や公園などの都市基盤が充実し、現在は全域が概ね良好な住宅地の景観が形成されています。新しいまちなみの所々に大きな敷地面積をもつ屋敷なども見られ、新旧の建物が混在する住宅地の景観が形成されています。

景観形成における課題

- ・地域特性やシンボルとなる資源を活かしたまちなみの形成とその維持
- ・建物の密度や形状など、ゆとりある市街地の保全
- ・地域のシンボルとなる資源の魅力の向上
- ・電線や鉄塔、屋外広告物などの景観阻害要因の改善
- ・色彩や建物高さなど、周囲と調和するまちなみの形成

区民が発見した江戸川らしさ



(4) 活力・にぎわい



本区では、子どもたちが公園やまちかどで元気に遊ぶ声、健康の道などでウォーキングを楽しむ夫婦など、区民の生き生きとした姿が多くみられます。また、四季を通じて様々なイベントや催しが行われおり、多くの人でにぎわっています。

駅前をはじめとした商業や、鹿骨を中心に点在する農業、松江に広がる活気に満ちた工業をはじめ、金魚養殖や屋形船、伝統工芸など水辺に囲まれた本区ならではの産業のある景観が、日々の暮らしの中で活力ある景観として形成されています。

景観形成における課題

- ・人の暮らしの姿を活かした景観づくり
- ・にぎわいを創出する機会や場の拡充
- ・地域産業を活かしたまちの個性の育成

区民が発見した江戸川らしさ



(5) 暮らしと活動



これまで区民と区は強いパートナーシップにより、多様なまちづくりを進めてきました。現在、町会・自治会を中心とする組織の活動、アダプト活動、環境保全活動など、区民活動が活発で、内容も多岐にわたっています。

景観形成における課題

- ・これまで培ってきた区民と区のパートナーシップの拡充
- ・身近な景観の改善
- ・景観まちづくり活動への意識の向上

区民が発見した江戸川らしさ



